卒業論文
西京区における地域活性化

京都経済短期大学　経営情報学科
２０１８年1月
今瀬ゼミナール　２回生

梅野　貴斗

大森　大暉

佐々木　琢成

杉森　正基

外山　宇海

林　龍也

目次

Ⅰ. はじめに 1
Ⅱ. 樫原学区周辺の調査結果 1
○調査手法 1
1.樫原三ノ宮神社の概要 2
○展示物からの読み取り 2
2.樫原地域の概要 3
○祭神 3
3.樫原三ノ宮神社の調査 4
○御由緒 4
4.革嶋春日神社の概要 4
○御由緒 4
5. 下桂御霊神社の概要 5
○創建 5

Ⅲ. 樫原祭り(2017 年度)
1. 樫原祭りについて 6
2. 実際の体験 6
3. 代表者へのヒアリング 8
○代表者桜井氏との会談と筆者たちの考察 8
4. 樫原祭り(神輿巡行)に参加した結論 9

Ⅳ. 樫原学区統合防災訓練
1. 樫原学区統合防災訓練参加にあたって 9
2. 実際の体験 10
3. 代表者へのヒアリング 10
○代表者入江氏の思い 10
4. 樫原学区統合防災訓練に参加した結論 11

Ⅴ. 全体の結論 12
Ⅵ. 最後に 13
Ⅶ. 引用文献 14
Ⅷ. 執筆分担 15

Ⅰ．はじめに

筆者たちは京都市西京区の樫原について調べることになった。その経緯は、以下の通りである。今瀬ゼミナールで地域活性化の取り組みの企画を考え、その企画したことを実際に行動にうつすことになった。その企画を考える際に何かないかと考えていた時に、通学途中にある「樫原三ノ宮神社」に興味をひかれた。そこから、三ノ宮神社がある樫原という地域を対象に研究と実践活動を行うべきであると考えた。調べていくうちに、地域活性化を図るような地域行事が行われていることを知った。資料で調査すると表面的なことしか分からないが、それらの地域行事に参加し、実際に体験することにより、文章化されていない地域のことや地域の方々と関わることにより感じることができ学べると考えた。そして、資源が元からあるかないかではなく、筆者たちや地域活性化を目的とする団体が地域の行事をもっと利用していく必要があると考える。

Ⅱ．樫原学区周辺の調査結果

○調査の手法

筆者たちは、地域行事に参加することによって、より地域について調査したいと考え、なかなかバスやバイクなどでは行けない場所に行ってみようと思い、阪急電鉄の桂駅から歩いて色々な場所をまわった。スマートフォンなどの電子機器を使うのではなく、樫原地域に置いてある地図や看板をたどりまわっていくことにした。その理由としては、スマートフォンを使ってしまうとすぐに目的の神社がどこにあるかわかってしまう。その他には、スマートフォンの地図を見ながら歩くより、地域の特徴や意外なところにある建物を見つけたときの達成感があると思い、地図と看板で回った。たどり着いた場所では、筆者たちが感じたことをメモに取り、訪れたときのイメージを残すために写真を撮り、情報を収集整理した。樫原地域は筆者たちが通学にしか使っていなかったため、あまりその地域にどんな歴史があるか、どんな神社や寺があるか筆者たちは知らなかった。したがって筆者たちが実際に現地に訪問することで調査しようと考えた。

1．樫原三ノ宮神社の概要

○展示物からの読み取り

現在、京都市・大政奉還150周年記念プロジェクトのスタンプラリーが行われている。そのスタンプラリーには、西京区の樫原三ノ宮神社もスタンプラリーのポイントになっている。樫原三ノ宮神社が西京区の歴史だけではなく京都市全体の歴史の形成に大きくかかわっていることが分かる。樫原三ノ宮神社には「樫原祭り」のボランティアとして訪れたことがあったが、よく知るためにもう一度訪れることにした。神社の拝殿の天井には三つの大きな絵が描かれていた。

一つ目の絵は幕末に起こった「禁門の変」という出来事について描かれたものである。その出来事で敗れて、この付近で闘死した相良兄弟を描いたものである。「禁門の変　殉難

志士」の絵が描いたものである。この絵を見ると、絵には炎の立ち上った町で新選組の着物を着て「誠」の旗を掲げてあったため、新撰組も関わっていた大きな出来事だということが読み取れる。新選組とは対照的に大きく描かれていた相良兄弟は涙を流し必死に逃げているように見えた。

二つ目の絵は、日本昔話の一つである大枝山が舞台の「おおえ山鬼退治　酒飲河童」が描かれていた。この絵には源頼光が巨大な鬼と戦っている場面が描かれている。この絵からは、鬼の巨大な力が絵自体から感じられる。そうとらえる理由としては、源頼光とは対照的に絵の三分の二を鬼が使っていたからだ。戦いの激しさが分かる一枚であった。

最後の絵は、日本神話に登場するスサノオが描かれた「素戔嗚大神」が飾られていた。スサノオの絵が飾られている時点でこの樫原三ノ宮神社はスサノオとの関わりがあると考えられる。スサノオが邪悪な龍を追い払っているように見えるため、スサノオがこの神社を守っているものだと考えた。これら三つの絵の共通点としてはあまりないと見られたが、この神社に関する大きな出来事を描いているのではないかと推測した。

(1) 今から４０年前、桂川以西地域一帯が右京区から分離独立をして西京区として誕生しました。その当時、人口は９万人でしたが、今日では人口が１５万人の人口と大学や専門学校を有し、洛西ニュータウンをはじめベッドタウンとしても有数の地域として発展しました。その西京区は歴史や文化、自然に恵まれた豊かな地域でもあります。しかし、これからの西京区を展望したとき、さらなる発展と同時に新たな課題も生じてくることでしょう。「安心・安全に暮らせる西京区」、「住んでよかったと思える西京区」のために、行政と西京区民が一体となって取り組んでいくことに、次世代に引き継ぐ私たちの役割があるのではないかと思っております。

※引用文献(1)「西京区４０周年記念誌」３６ページ

西京区制４０周年記念事業実行委員会　　平成２９年３月発行

上記の資料は、筆者たちが樫原学区の詳細を集約するより、簡潔であるため引用した。

2. 樫原地域の概要

○祭神

京都市西京区川島玉頭町には三宮神社があった。樫原三ノ宮神社同様に神社の境内の中には、舞台が建てられていた。本殿の横に二つ参拝するための神殿があった。その神殿はかなり小さいがしっかりと神様を祀ってある。樫原三ノ宮神社で興味深いのは、力持石だ。力持石は二つ置かれている。向かって左の石は、重箱石といい 120 キログラムの重さである。右の石は、団子石といい 75 キログラムである。両方ともかなりの重さである。人が動かそうとしてもびくともしない。このような石はもとからあったのか、それとも誰かが意図的に遊び心で置いているのか気になるところである。

そのほかに興味深いものとしては、境内の中に生えていた御神木ムクの木だ。「区民の誇りの木　ムクノキ」と書かれている。ムクノキは大きく神秘的な雰囲気が感じられる。西京区民の誇りの木と書かれており、樫原三ノ宮神社の緑守会の方々を中心に再生治療が行われている。西京区の住民の人々がこの木をどれくらい大切にされていることが分かる。

(3)祭神　鵜草葺不合命（うがやふきあえずのみこと）
父神　穂穂手見命（ほほでみのみこと）
母神　豊玉毘売命（とよたまひめのみこと）
祭神の御名は産屋の屋根を鵜の羽や葺草で葺き終わらないうちにお生まれになられたことに因んで命名された。（平成１１年２月吉日　建立）

※引用資料(３)「樫原三ノ宮神社　祭神」

3. 樫原三ノ宮神社の調査

○御由緒

2）　樫原三ノ宮神社は、いつごろ創設されたものなのかは文献がなく不明ですが、この地は樫の森があったことから樫原（かたぎはら）と呼ばれ、「柏原神社とも呼ばれていた時期がありました。御祭神は素戔嗚大神（すさのおのおおかみ・武勇の神）、酒解大神（さけとけのおおかみ・酒の神）、大山乍大神（おおやまぐいのおおかみ・山の神）の三神が祀られており、現在は三ノ宮神社と呼ばれています。古い言い伝えで洛西・大枝山（おおえやま）には今日に入洛する旅人を襲って金品を略奪する鬼がおり、その首領の酒呑河童（しゅてんどうじ）は人々に恐れられていました。平安中期の武将・源頼光（みなもとのよりみつ）・九四八～一〇二が、この小さな祠に供えてあった神酒を飲んだところ、たちまち酔いつぶれました。そこで、この酒を鬼に飲ませ、酔いつぶれたところを退治したといわれています。今でも洛西の大枝塚原に鬼の首塚があります。（鬼とは山賊のことだといわれており丹波の大江山説もあります。）このことから、鬼を退治できた「酒の神」、その武徳から神徳をたたえ、社が造営されたと伝えられています。また江戸時代には５代将軍・徳川綱吉（一六四八～一七〇九）がこの社の神徳を仰ぎ、徳川葵の家紋を許し社殿などを寄進しました。嘉永六年には攘夷祈願で孝明天皇が、社の造営をはかり御所絵師を差し向け孝明天皇の養子・華頂宮博経（ひろつね）親王からは菊華紋章入りの提灯などを下賜されました。本殿は昭和四十九年の第六十回新宮式年遷宮で伊勢神宮から下賜されたもので、拝殿は昭和五十一年に造営したものです。例祭は樫原祭（通称たけのこ祭り）と呼ばれ五月に行われます。神輿の装飾品は立派なもので、慶長金（一六〇〇年代）を用いたものだと伝えられています。

※引用資料(２)「樫原三ノ宮神社　御由緒」

4. 革嶋春日神社の概要

○御由緒

革嶋春日神社は、住宅地の中に突然現れたかのようにたたずむ神社である。春日神社の鳥居は他の神社と比べると比較的に小さい。筆者たちの感じ取ったことである。神社の中には神殿が二つある。ここの狛犬を見ると筆者たちのイメージする狛犬とは、少しイメージが違った。狛犬自体が怖いイメージだと考える。しかし、春日神社に置いてある狛犬は従来のものより、かわいかった。狛犬も祭られて神や建てられた人によってまた違うのだと思った。春日神社は、ほんとに大通りから外れたところにあった。神秘的な雰囲気が感じ取れた。神社の中には、メタセコイアの木が植えられていた。春日神社か興味深い神社だった。

(4)住古より、山城国葛野郡川島荘に祭られてきた神社で、春日大神（建御賀豆智命、伊波比主命、天児屋根命、比売神）を祭神とする。この社を守り伝えてきた革嶋家は、清和源氏の流れの佐竹氏であるが鎌倉時代、近衛基通の縁故によって川島荘の荘官となり、川島姓を名乗り、のち地頭としてこの地を領有することとなった。その故に藤原氏の氏神としたのであろう。

※引用資料(4)「革嶋春日神社　御由緒」

5. 下桂御霊神社の概要

○創建

下桂御霊神社は、おそらく桂学区に入るため樫原三ノ宮神社からは結構な距離がある。桂離宮に近い神社となっている。この神社の敷地としては広く感じた。神社の舞台のところに地域行事の写真が貼られていた。春にお茶会のようなものが開かれている写真である。お茶会が行われているところは、筆者たちは見たことがないため、写真を見る限りでは小さい子供から高齢の方まで幅広い年齢層の方が写っていた。そして、写真に写っている方たちは、皆さん笑顔である。このような、笑顔があふれている写真が撮れるところが地域行事のいいところだと再認識する写真だった。

この神社にも大きな木が植えられていた。ムクロジ（無患子）という木だ。ムクロジ科の落葉高木だ。樹齢は四〇〇年だそうだ。これだけの樹齢のため幹の方は空洞になっていた。それでも、このムクロジの木は神秘的なオーラが漂っている。それに加えて、この木もまた区民の誇りの木と書かれていた。下桂御霊神社は樫原三ノ宮神社から離れていたが、調べた成果がおおいにあった。

筆者たちは地域について調べる機会がなかったため、地域の歴史や建造物について、筆者たちが教養を深める良いきっかけとなった。筆者たちが調べた神社ではその神社やその所属している西京区で大切にされている木が多くみられた。それは地域と神社のつながり

を示しているのではないかと考えた。誇りとされている木をわざわざ神社に植えられているため、神社もそこまで知られていなくても地域や地域の方々にとっては誇れる存在で大切にされていると思う。地域を知る上では、その地域周辺のことを調べればもっと地域について身近に考えられると筆者たちは思った。樫原学区における文化も知識としてたくわえることができ非常に良い経験となった。

(5)貞観十八年四月十八日下桂御霊神社の祭神として勧請する（１１１７年前）桂光院智仁親王（桂宮）より後水尾天皇御使用の鳳輩を神輿として下賜。

※引用資料(5)「下桂御霊神社　創建　祭神」

(6)橘逸勢公
逸勢公は平安朝の元勲でありました。また、すぐれた能書家で嵯峨天皇、僧空海と共に三筆として称せられた。

※引用資料(5)「下桂御霊神社　創建　祭神」

Ⅲ. 樫原祭り(2017 年度)

1. 樫原祭りについて

樫原祭り自体は 40 年前から地域の活性化、地域住民のつながりを目的にスタートした。筆者たちが参加した「神輿巡行」は 25 年前から始まった。そして行事の運営は 12 年前から少年補導が担当するようになった。以前は西京区の中の 24 もの自治体が担当していた。現在は体育委員会、女性会、少年補導委員会、体育進行会、社会福祉協議会、民生委員などからなる自治連合会によって運営されている。自治連合会から運営費が出ているものの若干赤字が続いており、やりくりが大変ということだ。

2. 実際の体験

① 地域の方々へのあいさつ

樫原三ノ宮神社では、朝早くから樫原祭りの準備が行われていた。地域の方と樫原祭りの代表者である桜井氏に挨拶した。そこで、筆者たちは今回樫原祭りに参加させていただく理由や樫原祭りのスケジュールの確認を行った。

② 祭りの具体的な準備

この祭りでは神輿を主体とした祭りであるため神輿の準備に取り掛かった。神輿は最初から担げる状態ではないため最初から組み立てる。担ぎ棒同士を合わせて縄で固定してい

く。縄で固定する際に普通の結び方ではゆるんでしまう恐れがあるため男結びという結び方が使われている。なかなか男結びが複雑で筆者たちは戸惑ったが地域の方に優しく丁寧に教えてもらったおかげで無事結ぶことができた。男結びで結んでみるとかなり頑丈になっていた。ここで結びが緩くなっていたら子供たちが持った時にけがが起こる原因になりかねない。そのため、地域の方にしっかりと確認をとってもらった。そのあとは様々な部分に鈴をつけた。そして、最後に神輿のてっぺんに金色の鳳凰をつけて完成である。

③ 初めのあいさつ

祭り自体は昼から開始された。昼休憩から戻るともうそこにはたくさんの神輿巡行に参加する周辺地域の子供たちやその学校の先生、子供たちの保護者が集まっていた。最終的には100人程度の参加者が見受けられた。樫原祭りの実行役員の方のあいさつが終わり筆者たちにもあいさつの機会を設けてもらった。なかなか、地域の方々の前であいさつする機会がなかった為、どんな反応されるか心配だった。しかし、地域の子供たちや保護者の方々は暖かく歓迎していただいた。そして、樫原祭りは始まった。

④ 御霊入れ

神輿を担ぐ前に行われる儀式がある。それは、御霊入れだ。神輿を神社から出すときには必ず行われるようだ。筆者たちは御霊入れが行われるときに白と黒の縞模様の鯨幕で神輿を囲んだ。それは神社から御魂が移されるのを隠すために行われている。その理由はもっと深く調べる必要があると筆者たちは思った。そして、神主によって行われた。

⑤ 神輿巡行

以前は神輿を担いで巡行していたそうだ。しかし現在は2つのタイヤがついた専用の台車に乗せて巡行して一部の場所だけで担ぐ。その理由を地域の方に聞くと、「子供たちだけで担ぐのは怖い」、「担ぐのをサポートする大人の体力が持たない」、「参加する大人の高齢化」と言われていた。祭りを続けていくうえで参加者の高齢化は問題である感じた。

神輿巡行を行う際に神輿を押すのは筆者たち大人ではなく子供たちが押している。その中で、子供たちを大人たちがサポートしていた。筆者たち学生は、前と後ろに分かれて前の2人は神輿の方向の調整を行い、後ろの2人は神輿の進むスピードを調整していた。それ以外の人は、車どおりが多く細い道を通るため、子供たちの安全を守るために交通状況に目を配りサポートしていた。樫原三ノ宮神社を出発して、筆者たちは最初の目的地である樫原小学校へと向かった。神輿の周りには筆者たち学生以外に地域住民の方々、子供たちの保護者の方がついてくれた。子供たちは5班に分けられており、一定の距離を進んだら交代していく。それを同じように各班順番に回していく。そして、神

輿を押しているときは子供たちを中心に「ワッショイ！ワッショイ！」と掛け声を出している。もちろん我々学生も子供たちに負けじと声を出した。元気がよく活気溢れる子供たちと声を出していると自然と元気がもらえるような気がした。これは、一緒に回っている大人たちも思っているのではないかと筆者たちは思った。神輿を押していると家から地域住民の方々が出てきて子供たちを見守り、「がんばれ」などのエールを送る地域住民の方も見受けられた。それを見たときに地域の暖かさを感じた。

そして、中間目的地の樫原小学校に到着した。樫原小学校では休憩がてら子供たちによる太鼓の演奏があった。その太鼓の演奏はなかなか子供たちの演奏を見る機会のなかった筆者たちを含め保護者や地域住民の方々にとって子供たちの頑張っている姿が見受けられ、小学校の取り組みに対して関心を持つことのできる良い機会だと思った。そのあとに、神輿を専用の台車からおろして担いでグラウンドを回った。子供たちにとって神輿を担ぐことは良い経験になると思った。そこで神輿はかなり重いため、筆者たちが手伝った。グラウンドを最低でも班の数の５周は担がないといけなかった。神輿を担いで思ったことは、やはり、こういった体験のおかげで肉体的疲労がくる仕事は、若者の力が必要だと感じることができた。そして、神輿担ぎが終わると再び樫原三ノ宮神社に向かった。帰りも気を緩めず最後までサポートを怠らないようにした。

⑥ 終わりのあいさつ

最初に樫原祭りの代表者である桜井氏のあいさつから始まった。桜井氏は「今年の樫原祭りも多くの人が集まり、無事に終えることができてよかった。そして京都経済短期大学の学生が参加してもらえたので学生たちや私たちにとってもいい経験になった。」とおっしゃられた。そして最後に多くの方々から拍手をいただいた。最後に子供たちには大人からお菓子の詰め合わせとパックジュースが配られていた。筆者たちは樫原祭りを終えると、1人１人お世話になった方々に感謝のあいさつをして回り、最後に樫原祭りについてなど桜井氏にいくつか質問をさせていただいた。

3. 代表者へのヒアリング

○代表者桜井氏との会談と筆者たちの考察

桜井氏は「元気いっぱいで笑顔溢れる子供たちと触れ合うことが本当にうれしく、やりがいを感じている。好きだから続けることができる。地域やみんなの役に立てたらと思っている。」桜井氏の話されている様子を見た筆者たちは本当にこの活動を好きでやられているのが感じ取れた。祭りを開催する中で代表の方に直接話を伺うことがなかったため、良い経験や祭りの現状を知ることができた。自治連合会から運営費の援助は出ているが、赤字になる原因としては町内会に参加しない人の増加と筆者たちは考えた。町内会に参加しなくなった理由は、「役が回ってくるのが嫌だ。」「子供が卒業するから意味がない。」と桜井氏は述べた。役をやる人が限られ、いつも同じ顔ぶれで行事が行われるため、新しい人

が参加しづらい状況になっているようである。地域に住んでいる方の考え方がこういった現状を引き起こしているのではないかと考えた。筆者たちが参加した樫原祭りは、参加者の人数は比較的多く感じた。しかし、桜井氏は参加人数が減っていると述べた。自分たちの住んでいる地域で行われる地域行事に比べて参加人数は多かったため、樫原祭りの元々の大きさが話を聞いてわかった。桜井氏に樫原祭りについて質問することにより、樫原祭りの現状について知ることができた。この質問を通じて桜井氏が地域に求められていることや、これからの課題について考えていることがよくわかった。

4 樫原祭り〔神輿巡行〕に参加した結論

今回の樫原祭りに参加して、参加人数は多いが、やはり参加人数の減少は止められていなかった。また、子供の数だけではなく、筆者たちのような若い世代の人間が減少している方が問題ではないかと考えた。なぜなら、今、樫原祭りを運営されている方々は、高齢の方が大半であるのが現状である。そうすると、現在、樫原祭りを運営されている桜井氏をはじめとする方々が、一線を退かれると樫原祭りの存在自体が危ぶまれてしまう。樫原自治連合会の副会長である入江氏にも話を伺い、入江氏は「真剣な勝負による勝敗も盛り上がりの１つだが、行事に参加してもらうことに意義がある」と述べた。そして、桜井氏同様に、「準備や計画に大きな負担がかかる」と述べた。そこで筆者たちは、少しでも地域の方々の負担を減らすことも視野に入れなければならないと考えさせられた。今回参加したことにより、その課題を解決することが地域にとって重要なことであると導き出した。

Ⅳ. 樫原学区統合防災訓練（2017 年度）

1. 樫原学区統合防災訓練参加にあたって

樫原学区統合防災訓練は約 40 年前から行われており、今年で 40 回目になる防災訓練である。参加人数はおよそ 250 人の規模であった。通常は樫原小学校で防災訓練が行われるが今回は樫原中学校で行われた。その理由は、樫原中学校の体育館が今年の 1 月に新しくなり防災面で非常に優れた物になったため、試しに使用してみるということで樫原中学校の体育館で行われた。この体育館は防災機能強化型であり、具体的には屋上には太陽光発電のソーラーパネルが設置されており、さらに内部には暖房設備が整っており、長い避難生活を見越した物になっていた。縦杭が通常よりもはるかに多い 50 本以上使われており、耐震耐久性がある。それに加え、体育館自体が木でできており、保温性に優れていた。このように樫原中学校の体育館は災害時に避難生活であまり不便がないように設計されていた。また中も普通の体育館よりも広く多くの人が避難できるようになっていた。また災害が起こった時、樫原小学校が避難してきた人でいっぱいになった場合に使用するとのことだった。また 2017 年 10 月の台風が来たときも樫原中学校を避難所として開放されていた。

2 実際の体験

①避難誘導

実際に災害が起こったときのように、消防士の方と一緒に避難してきた人を筆者たちが樫原小学校から樫原中学校の体育館まで誘導した。

②救助訓練

この訓練では、筆者たちが実際に怪我をしたと想定された訓練だった。布と２本の竹の棒で簡易担架をつくることを学んだ。実際に負傷者がいる想定で訓練した。非常事態という状況で担架が無い場面でも非常に役立つ知識を得た。また、担架を簡単に持ち上げられるとは筆者たちは思わなかった。

3. 代表者へのヒアリング

○代表者入江氏の思い

この防災訓練の代表者である入江氏は、「この防災訓練は非常に重要なものであり災害が多数起こっているため防災を見直すきっかけにし、様々な場面を想定しながら飲料・食料・連絡手段などを１人１人が日頃から災害に備えることが重要である。」また、「阪神淡路大震災のときはタンスや家の下敷きになる人が多数おり、そのとき家の周りの近所の人に助けられた人が多いため、１人１人助け合う気持ちを持つことがなによりも重要である。」とおっしゃっていた。そして、「近所の支えあいも重要だ。」「実際に災害が起こるならば自治会と民政委員の連携が必要である。」「全員に状況の連絡が行き届くまで、時間がかかってしまうので改善すべき点だ。」とおっしゃっていた。この防災訓練の課題として、地域の役員が１年で変わってしまうのが課題であることが分かった。また様々なニーズがあるため、それに答えるのが課題であるとも述べた。避難するときにペットをどうするのかという問題があり、その問題も早急に解決しなければいけないことが分かった。代表者である入江氏に直接、話を聞き今後この防災訓練にどのようなことを期待しているかという質問に対して「この防災訓練をきっかけに隣近所の支えあいを見直し、なおかつ１人１人がいつ災害が起きても対処できるように準備をしてもらいたい」と述べた。また、避難中に怪我やアクシデントが起こった時には、各地区に救護班・救助班がおり今回の防災訓練でも班長を中心とし訓練されているので大丈夫であるとのことだった。

4. 樫原学区統合防災訓練に参加した結論

筆者たちが、この樫原学区統合防災訓練に参加した結論は、まず課題として、我々の若い世代が全くいなかったため、将来の防災の担い手の育成が必要であるということだと考える。この課題は筆者たちが樫原祭りに参加した時にも感じた課題であった。樫原地域だけではなく、色々な地域で若い世代が地域行事に参加していないということが現状である。そうなると日本から地域行事というものが、将来的に無くなってしまうのではないかと考

えた。そうならないように少しでも多くの若い世代が地域行事に参加するように我々がなにか働きかけることが地域にとって、非常に重要なことではないのかということを考えさせられた。

実際に、災害が起こったときに行う負傷者の手当てや、救助方法を学んだ。具体的には、地震が起きた場合には非常持出袋を持って外に出る、防災活動が落ち着けばまとまって避難所に向かうことができる。また、家に帰れる状況であれば家に帰っていいということを初めて知ることができた。そのため、実際に災害が起こった時にこの防災訓練で得た救護・救助などの知識を生かしていけると思われる。さらに、この防災訓練に参加することにより災害に対する考え方が変わるのではないかと考えられる。それにより災害というものをより一層真剣に考えられるようになった。そうすることにより、自分の身に危険なことが起こった時にこの防災訓練の知識・経験が生きてくるのではないかと考えた。また災害の時負傷者の救助・救護ができるようになったと考える。筆者たちは、この防災訓練に参加したことはとても有意義であると思った。

この今瀬ゼミナールでは、筆者たちがまず企画を考え、区役所の方々にその自分たちが考えた企画をプレゼンして、意見をもらい改善していき、樫原地域に詳しい人を紹介していただいた。そのプロセスにおいて初めて経験することばかりだったため、非常に良い経験になった。また防災訓練では、筆者たちが経験していない阪神淡路大震災でどのような被害があったのかを実際に経験した人から聞くことができた。さらに、樫原には断層がありとても危険で、地震が起こった場合どのように避難すればいいかなどを学んだ。

V. 全体の結論

今回は、樫原祭りと樫原学区統合防災訓練という二つの活動に参加してさまざまに感じたことがあった。まず、樫原祭りでの活動は筆者たち自身ほとんどがボランティア活動初めてであったため役割をしっかりと発揮できるか、活動に十分に貢献できるかといった不安があった。しかし、実際に参加してみると非常にやりがいを感じて、しっかり活動することができた。また、樫原地域の人たちは温かく接してもらった。また、活動においては非常にやりやすい雰囲気をつくってくださり、非常にありがたかった。

筆者たちはこの樫原祭りと樫原学区統合防災訓練という二つの地域行事に参加したが、あまり貢献できたとは思っていない。だが、地域行事に参加したことにより地域の方々と交流することができたのはもちろんのこと、今地域が抱えている課題というものを知ることができた。そのことにより我々のような若い世代がその課題を解決するためには何をするべきなのかを考えるとてもいい機会になった。

筆者たちは、地域活性化とはどのようにすればできるか、地域行事に参加して実際に地域住民の方々と交流し、また地域行事の代表者の方と話しをすることによって考えていた。その中で筆者たちは、これから何か新しく行事を企画することも大事かもしれないと考え

た。しかし、地域行事に参加した樫原学区では地域の方々から「参加人数が減ってきている」と述べられている。そのため、この参加人数が減ってきている中で新しい行事を行っていくことは地域の方からすればかなりの負担になる。樫原自治連合会副会長の入江氏もおっしゃっていたとおり、現状でも、今ある、行事の企画、準備がかなり負担である。そこで、筆者たちは新しく何か地域行事を行うのではなく、今現在行われている地域行事を地域活性化の資源として利用していくことがよいのではないかと考えた。実際に筆者たちは地域行事に参加することにより、地域と行事のつながりや伝統を知ることができた。この伝統は、地域によって違ってくるためそれぞれの地域特有のものなどを売り出していける。「この地域にはこんなことが行われているんだ。」や、「この地域のあの行事面白そうだから参加してみたいな。」と思ってくれる人がいるに違いないと考えた。そのためには、地域の方々と地域にある大学・学校の協力が必要不可欠である。この協力によって、今後の地域活性化の進展が左右される。そのため、今まである行事を地域活性化の資源とすれば地域の良さを無くさず地域をより良いものにできるということが考えられる。

Ⅵ. 最後に

今回企画から実行までほぼ筆者たちの手でおこなってきた。我々が経験したこともないようなことを経験させてもらうことができた。それが我々の活動をとおした成果であると考えられる。一方で、多くの方に迷惑をかけてしまったのが現状である。その中でも、我々の企画にアドバイスをくれた今瀬先生、西京区役所の職員の方の協力がなければ実行まで移すことができなかった。地域行事に参加できなかった筆者たちに地域行事の参加を促していただいた樫原自治連合会副会長の入江氏には感謝の気持ちでいっぱいである。本研究と実践活動の企画は多くの方の支えによりできた。この卒業論文を残すことにより、このような地域活動や行事を次の世代へと残すことができるのではないかと思う。そうすることにより、地域行事が無くなっていくのを防ぐことができるのではないかと考える。樫原祭りと樫原学区統合防災訓練の二つの研究と実践活動で学んだことを将来の何かの活動に生かしていければいいと考えている。多くの方に支えられているということと感謝を忘れずにこれからの人生に活かしていきたいと考えた。

Ⅶ. 引用文献

（1）「西京区 40 周年記念誌」　36 ページ
著者　西京区制 40 周年記念事業実行委員会
発行年　平成 29 年 3 月発行
（2）樫原三ノ宮神社　御由緒
（3）樫原三ノ宮神社　祭神
（4）革嶋春日神社　御由緒
（5）下桂御霊神社　創建　祭神

Ⅷ. 執筆分担

Ⅰ. Ⅱ　佐々木
　○調査手法　林
Ⅲ. 1 外山
　2 梅野　大森
Ⅳ. 123 杉森
　4 梅野　大森　外山
Ⅴ. 梅野　大森　杉森
Ⅵ. 梅野　大森　杉森
Ⅶ. 外山
Ⅷ. 外山